

---

# まどうし！

影雅 羅尉弥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

まどりうじ！

### 【Zコード】

Z9029T

### 【作者名】

影雅 羅尉弥

### 【あらすじ】

魔界から少しづれた世界の城。そこに住まつのは火、氷、土、雷、光、闇の六つの属性を司る6人の少女。あ、魔導師。ぶつちやけ何の捻りもない日記みたい！ いや、まあ、ちょっとくらいは事件起きると……いいな……

ひやつー シャドウー 見えちやこますー 見えちやこますよー

深夜。広い芝生の庭で踊る一つの影があった。

『『フレイム・ブラスト』！』

燃えるような赤い髪、瞳をした少女がそう叫ぶと、手に魔法陣が現れそこから炎が湧き起る。

「ちよつ、木に燃え移つたらどうするのよー』『クレイ・ウォール』！」

栗色の髪にブラウンの瞳をした少女もそれに応戦するように魔法名を叫ぶ。手に魔法陣が現れ、土で出来た壁が造られる。

「つむせーい！ ソイルが私のケーキ落とすのがいけないんだあー！」

「あれはアンタがぶつかってきたんだしょ！」

……訂正。踊つてない。戦つている、といつより喧嘩だ。

「とにかくソイルの寄越せー！ 『フレイム・アロウ』！』

「だからあたしはもう無いつてばー！」

ソイルと呼ばれた少女は矢のように飛んでくる火を避けると、手を振りかざした。

『万物の基礎となりし大地よ。我の手足となりし人形を顕現せよー！』今度は手ではなく、ソイルを中心には地面に魔法陣が現れる。それが発光したかと思うと、大きな土で出来た怪物。つまりはゴーレムが出現。赤髪の少女に向かつて拳を振り上げる。

「こんなところで上級魔法使うのー？ 『フレイム・ウォール』！ 炎の壁がゴーレムの拳を遮る。だが、上級魔法だけあつて押され気味だ。

徐々に拳が炎を押しのけ、魔法が壊されると思つた瞬間、

「二人ともいい加減にしなさーい！」

城の窓より金髪の少女が飛んでくる。

「うげつー ピール！ まだ起きてたのー！」

ソイルが慌てて魔法を解く。魔法を解かれたゴーレムはその場に崩れ、土も跡形もなく消えた。

「あなた達が騒がしくて寝られないの！ 一人ともそこまで！ フアイアも自分のせいなんでしょう！ 未練がましいことしない！」「うー、でもつ！」

「でもじゃないの！ またみんなで作ればいいんだから、大人しくしなさい！」「ううー！」

ファイアは駄々をこねる子供のようになめる。

「シャドウも呼びましょうか？」

「うぐ……分かったよー……」

しぶしぶ引き下がるファイア。

「二人とも大人しく寝ること。ソイルもこれ以上は言及しない」「いや、するつもりないし……」

「むー……。ピールがそういうなり……私はもう寝る」

「はいもう終わり。もう遅いんだから、早く寝なさい」

「はあーい」「

ソイルとファイアの声が重なる。それを見てピールといつ少女は満足そうにうなずいた後、元来た窓へと戻つていった。

「ここは、普通の魔界からちよつとだけずれた世界にある普通の城。火、氷、土、雷、光、闇の魔導師が住む城。……まあ、彼女達からすれば、ちょっと広いのだが。

「ふああ……」

「何ソイル。眠そだな」

朝食。ソイルの対面に座るのは白い髪に銀の瞳。低身長なのがコンプレックス「光の魔導師」レイだ。

「んー？ まあ昨日少しね……」

「ふーん……？」

「なーなーそれより今日はビーツるんだー？」

ファイアが全員に尋ねる。

「あたしはいつも通り午前中は庭のお手入れするわ。……昨日あんなになつたし」

まずソイルが答える。

「オレは特にやることないしなー。あ、シャドウの図書室いってもいいか？」

「……構わないけど、私の部屋は別に図書室じゃないからね？」

レイの言葉に黒髪黒眼の『闇の魔導師』シャドウが答える。

「あ、じゃあ私も」一緒にさせていただいていいですか……？ お城は昨日掃除したばかりですし……」

『氷の魔導師』アイスがおずおずと手を擧げる。

「……いいわよ？ ふふつ。貴女が来るなんて久しぶりね。私も自室で本でも読もうかしら」

「うー……。あ、ピールは？」

「ん？ 私はソイルの手伝いをするつもりだけ？」

「そつかーなるほどー。じゃ私もソイルを手伝うー」

「いいけど、邪魔だけはしないでよね？」

若干顔をひきつらせてソイルが言つ。

「しないしないー」

「あれ？ でも今日誰が見張り番だ？」

見張り、とはつまり、簡単に言うと魔物だ。ずれた世界に迷い込んだ魔物をいち早く見つけるのが見張り番の仕事。

「昨日は……」

「……私よ」

レイの後をシャドウが継ぐ。

「つてことはあたしかあ。……じゃ、ファイアはピールにやる」と聞いて、余計なことはやらないでよね

「はいりょうかーい」

ソイルはそう言い残して見張りに向かった。

「さうじゃあ、私達も行きましょう。ファイアはソイルのお皿も洗いなさいね」

本来は自分の食器は自分で洗うのだが、見張り番だけは他の人が代わりにすることになつてゐる。

「分かつてゐるよー」

ファイアとピールも立ち上がり、食器を洗いに隣の部屋へ向かつた。

「うづーまたピーマン入つてゐるし。シャドウ。頼んだ」

「頼まれないわ」

ピーマンを挟むレイの手を素早く掴むシャドウ。

「くつ……」

「……好き嫌いはダメよ。むやんと食べなさい」

「ちえつ。分かつたよ……」

大人しげピーマンを食べるレイ。

「あ、あのお……」

「……ん? 何?」

「いや……レイ普通にシャドウのお皿に入れていますよ?」

「……え?」

見ると、先程レイが食べていたはずのピーマンがシャドウの皿に移されていた。

「……ほお」

「あつ! アイス何余計なこと……くつ」

「……そうねえ、貴女光の魔導師だものねえ……幻術だったのねア

レ

「錯覚じやね?」

「……黙りなさい。わざと食べなさい」

「了解です」

身の危険を感じたレイは今度こそ自分で食べる。

「……ああ、食べ終えたら行きましょう。ついでに手伝つてほしいし

「えー手伝いもかよー。いいけど別に」

そう言いながら、レイは食器を洗いに向かつ。

「……アイスも行きましょ」

「あ、はい」

先に立ち上がりたシャドウを慌てて追いかけるアイス。

一方その頃である。いや、正確にはシャドウ達が食器を洗つている時。

「良かつたじゃない。ファイアの専門分野があつて」「こんなの望んでないー」

ソイルから庭仕事をバトンタッチされたピール達は今、土を燃やしているところだ。

「なんで私なおー」

「仕方ないじゃない。土には植物を喰らう微細性の魔物だつているんだから」

「そんなのどうせ土属性でしょー？ ピールがやればいいのこ……」

「あら。私じゃファイアも巻き込んだじゃうわ」「さらりと恐ろしいことを言ひペール。ファイアは分からないうだが。

「……はい。終わったー」

「よし。とりあえずこの土はもういいとして、次は庭木の手入れよ

「お、庭師らしい仕事」

「今のも十分庭師の仕事に入るけどね。あっちから順番に手入れするわよ」

「りょうかーい」「

まず一番奥の木から手入れを始める。

「あ、ファイア。この枝切っちゃって

「おつけー」

パチリ、と小気味良い音を立てて枝が切られていく。

「……よし、次の木」

「うりじゅー

順調に切りそろえていくファイアとピール。意外とファイアも器用らしい。

しかし半分ほどいったところで問題が。

「ん? 何これ

木とは明らかに違う色の物体。ピールはそれを確認するために枝をどかした。

現れたものは紫色のうねうね動く物体。（寄生性魔物）

「きやああああ!」

「うにやつ! ? どうしたピール! 」

突つ立つていて見ていないファイアはピールの悲鳴に何事かと驚く。

「ええい! 気持ち悪い! 」

バツと手を掲げるピール。

「ちょっと待つたピール! 木が死ぬ! ついでに私も! 」

先程の言葉はしつかり記憶していたらしい。

「なにこの気持ち悪いの! 」

通信用の魔法陣を発動させ、ソイルに連絡をとるピール。

『え? 何が?』

魔法陣からソイルの声。

「あ、そうよね。……えーと、なんか紫色の変なの」

『ああ。簡単に言つと魔物よ。色からしてまだ幼生体かな?』

「なにそれ……成体とかあんの……」

『うん。とりあえずそなたの前に燃やしちゃつて』

「え、ええ……。邪魔したわね」

ピールが魔法を解く。

「じゃあファイア。任せたわ」

「任しとけー! 」

木も燃やしてしまわないか心配だ。

……まあ結局、ちょっと木も焦げてしまつたが、一応は問題なく

庭木の手入れを終える。

「終わったわね……」

「中々面白いなー庭仕事」

くたくたのピールに対し、ファイアはまだやりたそうな顔だ。

「とりあえず……一回休んで、それからまたやりましょっ」

「はーい」

所変わつて、シャドウの図書室。……じゃなくて、部屋。

「おーシャドウー。光の魔導書どーじだー」

「……ああ、24ブロック15段、342番から43ブロック4段、182番まで光に関する書物よ」

「ん? おつ……つてだからビーダよー。ビーダよ24ブロックつて!」

馬鹿でかい本棚をバックに叫ぶレイ。

「……何回か来てるんだから覚えなさいよ。はー地図」

「覚えられつか!」

シャドウから地図をひつたぐると本棚の奥に消えていった。

「……はあ……」

「……ん? ビーダしたの? アイス」

「いや……いつきても大きな本棚ですね……レイが図書室つていうのも分かる気がします」

「……貴女までそんなこと……」

「あ、いえ……私は言こませんよ」

シャドウの部屋はとにかく本。といつか、本以外ない。いつもどこで寝ているのかと聞きたくなるほどに生活感がない。

「……貴女はビーダするの? 地図ならあるわよ?」

「あ、じゃあセーブします」

「……そう。はー」

ありがとうござります。と言つてアイスはその場を離れる。

「……まあでも……」

シャドウはその辺の椅子に座つて咳く。

「シャドウー！ 全然分かんないです！」

「……どうせ迷うのよね。あの子は。……分かったわ。ついてきて」「2プロックで迷つたアイスがシャドウを呼ぶ。

シャドウは苦笑しながらアイスの下へ向かつた。

「シャドウ、これどこが北でどこが南ですか？」

「……十字書いてあるわよね？」

「……あ、ホントだ」

「……はあ……」

額に手を当てて溜め息をつくシャドウ。

「……う……済みません気付かなくて……」

「……いえ、いいのよ。確かにちょっと小さすぎたつていうのもあるわけだし」

シャドウがそう言った直後、爆音。

「……あれは……レイの仕業ね。『めんなさい』アイス。ちょっと制裁をしてくれるわ。待つてて」

「あ、はい。分かりました」

シャドウは軽く手を振ると、軽々と本棚の上に飛び上がった。

「ひやつ！ シャドウ！ 見えちゃいます！ 見えちゃいますよー。」

「……大丈夫よ。どうせここには女しかいないもの」

そう言つてそのままレイの所へと行つてしまつた。

「そういう問題なのでしょうか……」

言いながら、アイスは椅子に腰掛ける。

「……私はどうすればいいんでしょう？」

シャドウがレイの下へつくと、立ち尽くすレイの姿。

「……レイ。何やつてるの」

「いや、ちょっと新しい魔法を覚えよつと思つてな。失敗した」

周りに本が散乱している。どうやら巻き込んで吹つ飛ばしたらし

い。

「……片付けは誰がやると思つてゐるのよ」

「お前」

即答だった。

「……貴女ねえ……」

『どうやって制裁をしようかと考えていると、辺りに魔法陣が浮かぶ。土色に光つてゐるところをみると、ソイルの通信魔法だらう。』

『シャドウ！ 魔物よ魔物！ 光属性だからあなたの出番よ！』

「……分かったわ。レイ。私が帰つてくるまでに片付けること。じや」

またもや本棚を飛び移つて部屋を出て行つた。

「えー、この量をかよー」

一人レイは喚いていた。

「……で？ ソイル。そいつはどう？」

『えーっと……今はまだ門の前。でもほつとくと入つて来ちゃうかも』

「……分かつたわ」

長い廊下を走りながらソイルに状況を聞く。

「……久しぶりの私の獲物だものね。たつぱりと楽しませてもうらうじやない」

『……魔物退治を楽しんでるのってあんただけよ』

「……あら？ ソイルは楽しくないの？」

『楽しいワケないでしょ！？ 面倒だし！』

「……そう。まあいいわ。もう切つて大丈夫よ」

『はいはい』

それを最後に、ソイルの魔法陣が全て消える。

「……さあて……と」

門前で徘徊している魔物（ドラゴン型）を見つけると、シャドウは思わず笑みを浮かべる。

「……待たせちゃったわね。すぐに……」

手を前に突き出す。そこから真っ黒な魔法陣が現れる。

「……楽にしてあげる！」

言い終わると同時に黒い霧のようなものが凄まじい速さで魔物に向かっていく。

魔物は身を翻してそれを避ける。

「……ああ、そっか。説明し忘れてた。『相対属性』っていう理論がある。まあ簡単には火と氷、みたいなやつだ。相対属性の場合はダメージが増えるっていう理論。この場合は光と闇。だから、お互いの被ダメージが増えてしまう諸刃の剣なのだが。

「……どんどん行くわよ……」

両手に別々の魔法陣を浮かべて、まず右手を相手に向ける。

魔法陣から真っ黒な霧が大口径のレーザーの様に魔物に襲いかかる。

「……ドラゴンは攻撃というより回避に長けた魔物だ。こういう誘導性のない攻撃をかわすことなど容易である。

「……甘いわね」

ここでシャドウは左手の魔法陣を発動。いや、正確には発動させていた魔法陣はトラップ性の魔法だ。条件が揃うことで発動する魔法。

魔物の周りを黒い球体が囲む。それが一斉にはじけた。  
「……まだまだ行くわよ！」  
「……それの魔法を解き、先程のトラップで体の一部を破壊された魔物に今度は両手を向ける。

「……これはどうかしらッ！」

大きな魔法陣が現れ、中心に黒い球体を造る。

「……今回は特別に誘導効果も付けてあげるわ……」  
黒い霧を吸い込むようにしてどんどん巨大化する黒い球体。魔物

を簡単に飲み込みそうだ。

「……消えなさい」

シャドウがさらに両手を前へと突き出すとその大きな球体は比較的ゆっくりと魔物へ向かっていく。当然、避ける魔物。

だが球体は魔物の方へと方向転換し、また比較的ゆっくりと進んでいく。

「……早く当たればいいのに……」

少し苦しそうな表情を浮かべて叫ぶシャドウ。誘導効果というのは便利な分、単純魔法より魔力を必要とするために魔法を維持することで徐々に体力を奪われていく。

だが、運がいいのか魔物の尻尾部分に黒い球体が当たる。瞬間、その球体は魔物を包み込んだ。

「……ふう。疲れるものね。いじめ殺すのってこっちも疲れるわ……」

いい性格したシャドウは軽く溜め息をつくと、開いていた手のひらを閉じた。

黒い球体はそれに呼応するように急激に縮小し、魔物を巻き込んで消滅した。

「……あ、力入れすぎちゃった。ギリギリで止めて断末魔くらいさせてあげようかと思ったのに……」

いい性格も考え方だ。

「……さて、レイ。これは一体どうこう事かしり

「さあ？」

「……平然ととぼけるんじゃない

シャドウの部屋に戻つてみれば、ひどい有り様だった。もう散らかっているとかじやない。まさしくカオス。

「いや、一回片付け終わつたんでもう一回やつてみようかと……」

「……外でやるうとか思わなかつたの?」

その手があつたか、と言いたげにポンと手を打つレイ。

「……いいわ。貴女は私が一から教育し直してあげる」

「いや間に合つて……つていたたた！ 悪かった！ 悪かったから

離せ！」

そんな悲鳴を残してレイとシャドウは部屋を後にした。

……もう一人いたことなど忘れて。

「……うう……遅いです……どうしちゃったんでしょう……？」

椅子から立ち上がり、辺りを行つたり来たり。

「……まさか……忘れて……わひやつ！」

何も無いところでアイスは転ぶ。それがドジっ子のお約束。

「居もしない魔物来襲報告してやるわかしきー。

「そつそんない」とより、アイスは「いのか!-?」

「……え?」

「お前の部屋に取り残されてんぞ」

「……あつ」

レイの言葉でようやく思い出したシャドウは座しナガな魔導書を開じ、自分の部屋へと走り出す。

「……レイはそこから抜け出せたら許してあげる」

「ええ!-? 無理だろこんなん! あつちよ-!」

レイは手と足を黒い霧に包まれ、身動きがとれないでいる。

「手もふさがれちゃ 魔法も使えないじやねえかよお……」

「うあえず『丶丶丶』転がつてみるレイだつた。」

「……すつかり忘れていたわ……」

レイではなく、魔物のせいとは口が裂けても言えないだろひ。

「……それにあの子絶対なにかやらかしそうだし……まあ、可愛いから許すけど」

可愛いつて永遠の正義よねーとか、そんな事を思いつつ部屋のドアを開ける。

「……あの場所にいるのかしら……」

先程待たせた場所に向かう。だが、アイスの姿はなかつた。

「……一体どこに……」

「あー シャドウー 遅かつたですねー!」

搜索魔法でも使おうかと思っていたとき、声がかかつた。

「……アイス…… 一体どういう状況なのよ……」

「いえ…… うあえずは自分で見つけられたんですけど、高くて……」

「……」

アイスは本を何冊も積み上げてその上に座っていた。17段目なのでかなり不安定。というか、良くそこまで積み上げたものだ。

「……あっちに梯子あるわよね？」

「え、そなんですか？　じゃとりあえず……ひやつ！」

まあ、当然バランスを崩すわけで。大量の本と共にアイスが落ちてくる。

「……あ、はは……結局こうなるのね……」

覚悟を決めたように、そんな事を言い残すシャドウ。

バサバサツにドシャツという一連コンボで、少し埃が舞う。

「……いたたた……大丈夫です……か」

アイスが何かに気付く。

「……痛いわね全く……」

そこまで言つてシャドウも口を噤む。

「……えーっと……アイス」

「はつはい！」

「……何かしらこの手は？」

落ちる時にシャドウがクッショーンになつたらしい。シャドウの上にアイスが覆い被さるようにして倒れていた。それはいい。問題はアイスの置かれた手。しつかりとある部分を掴んでいたのだ。……シャドウの、胸を。

「ひう！　すすす済みません！　ホントに！」

慌てて手を離すアイス。

「……まあ、別にいいんだけどね。減るもんじゃないし。つか減るもんつてなによ？」

「あう……」

真っ赤になつてアイスは俯く。

「……それと、そろそろ起き上がりつてもいいかしら？　貴女にその気があるのなら別だけど」

「なつ、ちつ違います！　すぐ起きます！」

急いで起き上がり、シャドウから離れる。

「……そつ……その気はないのね……」

「なんで残念そつにしてるんですかつー」

「……ふふ、冗談よ冗談」

シャドウも起き上がる。

「……さて、片付けましょうか……」

「あつはーー済みません」迷惑をお掛けして……

「……いいわ。慣れっこだしね」

とりあえずその辺の本を拾い上げるシャドウ。

「……大体の本はー3ブロックのものね?」

「あ、はーい。隣の本棚です」

アイスも拾つて一力所にまとめる。

「……あ、貴女が持つと……」

持ち上げようとするとアイスをやんわり止めようとする。

「大丈夫です……ひやあ！」

バランスを崩し、あえなく転倒。

「……はあ……」

「「めんなさこ」「めんなさこ……」

「……いいわよ。もう一度まとめればいいのだし。持ち上げなくていいけどね」

「「うう……」「めんなさこ……」

「……何回も謝らないの。ほら立つて」

シャドウが手を伸ばす。アイスがそれを取ると、シャドウはアイスの手を引っ張った。

「……なんでいつも失敗しちゃうんでしょー?……」

「……もつそういう性格なのよね。仕方のないことよ」  
どっちかっていうと属性よね、と心の中で付け足す。

「性格……そなんですか……」

「……嫌なの? そういう性格」

「いえ、そういう訳じや……」

シャドウはいまいち要領を得ない、といった顔だ。

「まあ、これだけ人が集まつてゐるんですけどもんね。色々な性格がいて当然ですよね」

「……六人だけね」

「細かいことはいいんです！」

「そういうものかしら……、とシャドウは顎に手をやる。

「……つてそれはいいのよ。早く片付けましょ！」

「あ、そうでしたね」

アイスと一人で片付ける。

「……じゃあ、あの梯子使つていいから。何かあつたら呼んでね」「分かりました」

アイスの下を離れ、レイの所へ戻る。

「……どうせレイじや抜け出せるはずないもの。急がなくちゃ」  
何だかんだ言つてやはりレイが気になるらしー。

扉を開けて中へ入る。

「……あ」  
床に寝つ転がつて眠るレイの姿。魔法は相変わらず掛けられたままだ。

「……ホント、子供ねえ……」

溜め息をつきながらレイの手足の魔法を解き、抱き上げる。

「……どこに寝かせておこうかしり……」

とりあえずレイの部屋へおこしておこつとする。

「……んー……ふああ……」

「……あ、起きた？」

眠い目を擦りながら目を覚ますレイ。

「……あれ？ なんでオレ運ばれてんの？」

「いまいち回らない頭を回して考えるレイははつと向かに氣付く。  
「つまうー？ まさかアレか！？ まさかオレにそりなる教育を施すつところのか！？」

「……やつてあげようか？」

ちよつとだけ心配した私がバカだったわ……。とシャドウはそん

な事を思つのだつた。

シャドウが本の襲撃を受けていた頃、ピール達にも新たな試練が待ち受けていた。

「ほらほらファイア。早く運んで」

「うー！ なんで私ばかり重労働なんだあーー！」

少し前に焼いた土を運んでいるところだつた。

「いいじやない。私と比べたらファイアの方が力持ちだしね」

「でもこんな地味ー！ もっとなんか花に水あげたり雑草刈つたり邪魔な枝ぶつた斬つたりとか！」

「ファイアの中では物騒な仕事なんだね。庭師つて。そしてそれはもうやつたよね？」

「とにかくとにかく！ もうちょっと面白いものはないのかつ！」

握り拳して熱演。

「どこの主人公なのそれ。ていうかこれ終われば水やりなんだから我慢しなつて」

「おお！ ジャ急ぐぜ善は急げーー！」

土を運んでいるとは思えないスピードで走り去るファイア。

「……急いでどうするの……つていうかあの子運ぶ場所分かつんのかな？」

「早くしろーピール！」

「あーはいはー！ あんまり先行かないでよねーー！」

結局ファイアの後を追うこととなつたピールである。

そしてさらに同時に。見張りの部屋と扉に掛けられた札。つまりソイルが見張りを行つてゐる部屋だ。

「……ふあああ……眠……」

暇そうに庭でのファイア達の騒ぎを見ているソイル。

「……ホント、ファイア失敗したりしないでしようねえ……」

ボーッと、すごい勢いで荷車を引くファイアを見ながら呟く。

「ま、ピールもいるし大丈夫よね。……ん……はあ……」

大きく伸びをして、見張り再開。

「……ていうかさあ……魔物なんてそう簡単に来なにつつの……」

先程来たのは棚にダンクシューートである。

「それにしても暇だわ……暇潰しにファイアに上級魔法使ってやろうかしら……」

酷い暇潰しだ。

「つていうかそうー、昨日のもファイアのせいなのにファイアには追つかれられるわピールには怒られるわ、ホント意味分かんないっ！」

根に持つているようだ。

「つーかそうよー、そもそもファイアがケーキの皿もって走り回るのがいけないのよー、『部屋で食べたかったのにー！』とか子供かいっはー、バツカじやないのー！」

どうやら頭は完全に昨日のことへとシフトしているらしく、愚痴にしか聞こえないのは内緒だ。

「あーもうなんか腹立つてきたー、もつ居もしない魔物来襲報告してやるうかしらー！」

それじゃただのハツ当たり。

「……あ

シャドウが思い出した様に声を上げる。

「どうした。シャドウ」

「どうしたんですか？」

質問するのはレイとアイス。……ソイルは怖いので放つておこう。

「……お昼ご飯作らなきやと思つて」

「あーそうか。じゃシャドウがんば」

「……貴女達もやるのよ」

「私もですか！？」

「当然、といった感じで頷くシャドウ。

「……こんなちびっ子と一人なんて不安でたまらないわ」

「つっせ！」

「ま、まあとにかく！ 私でいいなら手伝います」

「いがむレイを落ち着かせながらシャドウに言つ。

「……あらがと。じゃあそと決まれば早速行きましょう」

「そう言つて歩き出すシャドウとアイス。

「なあオレ、行くつて言つてないよな？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9029t/>

---

まどうし！

2011年6月12日23時11分発行